

わんぱくフェスティバル冬 ～せいりょうむかしあそび～

団体名 ● いしかわ子ども交流センター活性化プロジェクト / 代表者名 ● 山岸知樹 (人間科学部こども学科3年)

はじめに

昨年度は、交流センターのHPへの掲載や交流センター内にポスター掲示を行い、イベントの周知に力を入れたことに加えて、新イベント「わんぱくフェスティバル冬～せいりょうむかしあそび～」の実施や新型コロナウイルス対策を徹底して行ったこともあり、コロナ禍にも関わらず、多くの方が来館した。子ども向けのイベントを企画・運営する際には、子どもにいかにも楽しんでもらうかを考えるだけでなく、学生自身も楽しんで子どもと関わる大切になってくる。また、子どもの年齢・発達・興味関心の状況に合わせた対応をすることで、広い視野と臨機応変な対応力を身に付けることができると考える。昨年度は、当団体での活動が交流センターのイベントとして定着することを目標としていた。イベントを通して、保護者や子どもたちから、「楽しかった」「遊んだことのないものがたくさんあってよかった」「いつもありがとう」といった声をいただき、保護者アンケートにおいても高評価をいただいた。

活動内容

1月に交流センターで子ども向けのイベントを企画・運営した。企画内容は、「ドキドキ！ハラハラ！だるまおとし」(だるまおとし)、「そらとベタケコブター」(製作)、「みんなでかこう絵馬づくり」(製作)、「あしでねらってたおせ」(足ボーリング)、「むかしむかしのこれなあに？クイズラリー」、「みんなでつろうだるまさん」(シール制作物)の5つのブースを設けた。クイズラリーの景品として手作りの絵馬を配布して願い事を書けるようにしたり、ゲームブースに参加することで、だるまづくりで用いるシールを配布し、繰り返し遊びたい工夫を行った。来館してくれた子どもや保護者の方々からも「こどもにとってこういうイベント、体験はとても貴重です。ありがとうございます。」など好評の声が聞かれた。さらに、昨年度は12月にもイベントの一部を企画・運営し、活動の幅を広げることが出来た。今までの活動を活かし、好評だったブースの分析やアンケート

でいただいた意見などを反映させ、イベントの質の向上、自分たちのスキルアップを図っていききたい。具体的には、製作ブースの充実や子どもと保護者が共同で活動できる企画を取り入れていきたい。また、引き続きコロナ禍ではあるが、交流センターから募集のあったイベントには積極的に参加し、センターの職員や参加した保護者と子どもの動向などを観察することで、自分たちの力、センターの活性に活かしていく。

成果、結果の考察

今回の活動では、来館していただいたこどもや保護者の方々から、「昔のことを楽しく学ぶことができた」や「こどもが大喜びでした」など好評の声を多くいただいた。実際の子どもの様子を見ても笑顔でゲームに参加してくれて直接「楽しかった」と教えてくれた。クイズラリーをブースの近くに配置したり、全てのブースに参加した方に絵馬をわたすなどして集客を促す工夫を凝らしたことが要因に挙げられる。また、テーマを昔遊びにすることでその当時の遊びを肌で感じ、家族との関わりにもつながった。

今後の課題、展望

来館してくださった保護者の方々からは好評の声が多かったが「だるまおとしがすぐ落ちてしまい難しかった。」というだるま落としに関する意見があった。だるまおとしは事前に何度も大学生間でシミュレーションをしていたが、成功率が極端に少ないまま当日を迎えてしまった。本来は幼児や児童向けの遊びなので難易度が高くなりすぎてしまった。うまくいかなかった要因としていしかわ子ども交流センター活性化プロジェクトの人員不足が挙げられる。昨年度はメンバーの半数が4年生で卒業論文や就職活動でほとんどが参加できず、残った3年生も今年度の教員採用試験の勉強があり基本の活動として3、4人でしか活動できなかった。来年度は、本格的な教員採用試験の勉強を控えた3年生と2年生しかいないため誠に残念ではあるが、昨年度でいしかわ

子ども交流センター活性化プロジェクトの活動は終了することとした。



この写真はイベント当日の受付の様子の写真である。受け付けでは、まず来館して下さった子どもや保護者に対して、イベントの説明やクイズラリーに使う用紙を渡していた。そしてクイズラリーが終わった方に特典として絵馬を配布し受付の後ろに書いた絵馬を展示できるブースを用意した。ほかにも写真に受付の後ろにあるホワイトボードのあるスペースは、ゲームが終わったらもらえるシールを貼って完成させる制作物を用意した。



この写真は「そらとベタケコプター」のたけとんぼを制作するブースの様子である。会場では、作り方を書いている用紙を置いておき、簡単に作れるようにしていた。実際にできた竹とんぼは飛ばせるように空いているスペースや別室を用意して安全に飛ばせるようにしていた。また自分の方向に飛ばしてけがをする子どもを出さないよう、正しい飛ばし方を指導した。楽しく遊んでいる子どもが多く笑顔がよく見られた。